

奈良 いのちの電話

2021
秋
第386号

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp

特集

奈良少年院での矯正教育 ～非行少年に寄り添って～

蒔絵螺鈿箱「雨上がり」

作・北村 繁



八千種の花はうつろふ
常磐なる松のさきを
我れは結ばな

大伴家持

作品の大きさ 縦15.0 cm 横30.7 cm 高さ11.0 cm

風鐸



夏の全国高校野球選手権奈良大会は2年ぶりの開催となった。

昨年は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大防止の観点から、選手権大会は中止。奈良県では「甲子園を目指す」大会ではなく、高等学校野球連盟による「奈良県が一番を決める」独自の大会、「令和2年奈良県高等学校夏季野球大会」が開催されることとなった。

2021年は、2年ぶりに「甲子園を目指す」大会が開催された。入場行進を見送るなど開会式を簡素化、試合間隔を原則40分以上とし、次の試合の選手と接触がないよう入れ替えを行う、ベンチやバックヤードな

どの消毒を徹底、選手の保護者や控え選手、関係者のみの「無観客試合」とするなど、感染症対策を講じた。

46校37チームの選手が熱戦を繰り広げる奈良大会の場所は、奈良県橿原市の佐藤薬品スタジアム。奈良テレビ放送では例年この大会を、中継は3回戦以降、ハイライト番組は大会初日より放送している。

今年ならではの試合は、高校再編のため閉校が決まり最後の大会となる部員10名の平城高校と、その移転先に決まっている奈良高校の対戦であった。奈良高校は春の甲子園への出場経験もある強豪校だが、接戦の末、平城高校が意地の勝利を挙げた。

試合はシード校が順当に勝ち進んだ。決勝戦では高田商業高校を破り、智辯学園が20度目の甲子園出場を果たした。大本命と言われていた中での優勝はプレッシャー

を感じさせない素晴らしい戦いぶりであっばれというほかない。

奈良県内では、幸い選手や関係者から感染者は出なかった。しかし他府県に目をやると、感染症の影響により石川県の星稜高校や神奈川県東海大相模高校など、出場辞退を余儀なくされたところもある。開催自体も危ぶまれる中、無事大会を終えられたのは、奈良県高等学校野球連盟をはじめ、関係者の皆さんの尽力があってこそと、敬意を表したい。

この広報誌が発行される頃には、春の甲子園を目指す地方大会が繰り広げられている。感染症の状況はどうなっているのかわからないが、できることなら多くの観客が集まったスタジアムで歓声が響く中、最高のプレーをしている選手たちを見たいものだ。(繁)

寄り添い人を訪ねて VIII

奈良少年院での矯正教育

～非行少年に寄り添って～

10代の自殺が社会問題になっている現在、若者の生きづらさに対し我々大人はどう向き合っていけばよいのでしょうか。今回の“寄り添い人を訪ねて”は、非行少年を収容し矯正教育を実施している奈良少年院を訪問し、施設の見学をさせていただくとともに、日々少年の更生に向けて尽力されているお二人の法務教官（教育現場の責任者と実際に指導を担当している教官）にお話を伺いました。

奈良少年院について



少年院は、家庭裁判所の決定により保護処分として送致された少年を収容する法務省所管の施設です。少年院では、在院者の特性等に応じた矯正教育、その他の健全な育成に資する処遇を行うことにより、改善更生と円滑な社会復帰を図っており、おおむね12歳から20歳までの少年を収容しています。

奈良少年院は、昭和28年4月に法務省設置法により特別少年院に指定され、翌年6月から収容を開始しました。平成27年6月には、法改正により第1種（心身に著しい障害がないおおむね12歳以上23歳未満）及び第2種（心身に著しい障害がない犯罪的傾向が進んだおおむね16歳以上23歳未満）少年院に指定され、現在に至っています。第2種少年院は、全国に4か所ありますが、奈良少年院は主に近畿の家庭裁判所での審判の結果、第1種又は第2種少年院送致決定となった男子少年を収容しています。

現在の収容は約40名で、標準的な教育期間は11か月から12か月です。家庭裁判所の勧告によっては、更に長期間に及ぶこともあります。

少年院での矯正教育には、生活指導、職業指導、教科指導、体育指導、特別活動指導の5つがありますが、奈良少年院では特に、「未来・希望・自立」を旗印に、心身共に健康で心豊かに生活できる若者、自立心に富んだたくましい若者を育てることを目標としています。

非行少年への思い（指導担当教官から）

少年院では、全国の少年院で行う共通のプログラムのほか各施設で特色化が図られ、当院で行っている「育児プログラム」はその一つです。助産師の指導によって行われる育児プログラムは、女性や子育て、家庭生活に対する正しい知識や関心を深めさせるとともに、生命尊重の気持ちを育むことを目的に行っています。少年の中には、入院後、成人に達し、既に子の親の少年もいます。また、幼少時から虐待を受けてきた少年もいます。そうした少年が、妊婦や育児の疑似体験

を行うことで、幼い命の重みと危うさを実感し、生んでくれた母への敬愛の情を深めるなどします。

少年院は少年にとっては家庭裁判所の決定で強制的に収容された場ではありますが、教官は、彼ら一人ひとりの少年との出合いやつながりをとても大切に、同時に健全な大人のモデルになりたいと考えています。多くの少年は、成育歴や家庭環境にひとかたならぬ問題を抱え、社会で生き残る手段として、価値観を共にする反社会的な不良仲間との狭いつながりの中に自分の存在価値を見出し、不遇感から大人に不信を抱き、心を開いた関わりを自ら避けてきた傾向などがあります。そのような少年たちと一から信頼関係を築き、育てなおしの教育を行っていくことで、自分にも本気で向き合ってくれる大人がいるのだ、こういう大人もいるのだと徐々に健全な価値観が内面化し、人とのつながりを大切に、人を信頼することで信頼される大人へと成長が促されていきます。

奈良少年院では少年院での生活が2回目以上の割合も高く、中には、自分には何も無い、何をやっても失敗ばかりでダメ人間といった、心が疲弊し萎えた状態で入院してくる少年もいます。そのような少年たちが、当院の陶芸科や農園芸科などの職業指導や、体育指導を通して、日々の努力が報われ、成功体験を積みきっかけとなることがあります。陶芸科では、毎日の物づくりを通して創造力と情操の涵養、自尊心の回復にもつなげています。農園芸科の畑作業では、毎日、夏場でも農場管理や手入れを汗流して行うことで、見事な出来栄の作物の収穫につながり、少年院の食事に供されることなどで、格別な得難い達成感を得ることができます。また、他の農園芸科生と協力し、その場の状況に応じて物事に対処する能力の獲得や、諦めず最後までやり遂げる力を養うことなどにもつながります。

ワンチームで（指導担当教官から）

少年は教官のことを実によく観察しています。奈良少年院では、若手教官もベテラン職員も、あきらめない姿勢を大切にして少年と共に学ぶ姿勢で、寄り添いながらの指導を続けています。その姿勢は、健全な大人のモデルとして、少年との信頼関係を構築する上で欠かせないものと感じているからです。出院した少年に二度と非行に走らせないことは、我々教官の一番の望みであり、社会的要請でもあります。

少年院での教育は、先に述べた職業指導などと別に、集団に対して行う集団指導と個別の問題性に応じて行う個別指導を織り交ぜながら行うところに特徴があります。個別指導では、担任教官との信頼関係をベースとして、自主的な気持ちを尊重し、受容することを心掛けています。もちろん「ダメなものはダメ」という指導も大切です。様々なタイプの少年

の指導がうまくできるようになるには、やはり経験と自己研鑽が必要と感じています。

奈良少年院では、ベテランと若手教官がチームを組み、同じ方向性で協力して少年と交わり親身に関わっていくという良き伝統があり、そのような助け合いが若手職員の育成にもつながるなど、奈良少年院の強みでもあります。処遇に当たる教官がワンチームでやっていくことで、少年院全体がまとまり、少年たちも安全・安心な環境の下、自身の問題に落ち着いた気持ちで向き合うことができるのです。

出院後のこと（責任者から）

現在、国を挙げて再犯・再非行防止の方策が進められています。少年院では、少年の出院までに、更生に向けた居場所と出番を確保することがとても大切と考えています。多くの少年は引受人である家族の許へ帰ることから、保護者会などを通して保護者に対して少年院の教育への理解を促す取組や保護者参加型プログラム、面会で少年の出院後の問題点について担任を交えて話し合うなどしています。中には、親許に帰ることができず、更生保護施設で引き受けていただくケースもありますが、その場合でも保護観察所と連携し、十分な調整と、少年の更生に向けた自覚を再三促しています。

また、多くの少年は、出院後、社会に戻り、遅かれ早かれ職業人として生活することになります。それまでの少年は、少年院に入院するまでその意識が薄く、すぐに仕事を投げ出したり、職場で円滑な人間関係を築くといった経験が少ないか、失敗してきた少年です。少年院では実際の職場での仕事や人間関係を想定し、職業生活設計指導でビジネスマナーやパソコンなども教えています。そして、就労支援や職業適性検査などを通して、一人ひとりの少年のニーズに応じた社会復帰支援に力を入れています。

在院中、それぞれ自身の問題に真剣に向き合ってきた少年たちですが、社会復帰後は多くの危険がはらんでいるのが実情です。そのため、少年院では社会内処遇との連携に配慮しながら、少年院で残された課題は確実に保護観察に引き継ぐなどしています。出院者や保護者からの相談に応じる制度もあり、相談は積極的に受けています。

出院する少年は、そのほとんどが仮退院であり、保護観察が付されるわけですが、社会の厳しい目にさらされながら、二度と犯罪や非行に及ばないよう、自立した大人としての生活が望まれます。円滑な社会復帰には、受け入れる家族や社会の理解と協力が不可欠です。少年院では社会資源を活用し、矯正教育を院外で実施することや、社会貢献活動なども行っています。また、施設見学会や非行相談などの社会貢献セミナーの実施などを通して、少年院の広報やこれまで培った非行少年の処遇についてのノウハウを社会に還元してお役に立ちたいと考えています。

引き続き、地域の皆様には温かいご支援とご理解をいただきながら、職員一丸となって、少年と向き合い、そして寄り添い、非行少年の健全育成を通して社会に貢献し国民の負託に応えていきたいと考えています。ワンチームで！（Y・K）

多様性の時代に

つなぐ ⑥

～ 時には他者へ思いをはせて ～

奈良交通株式会社 相談役 谷口 宗男

人が他者となんのつながりもないということはありません。先祖がいるから自分の存在がある。世間と没交渉でと、生活する中で他人に必ず何らかの世話になっているはずである。「おかげさま」という言葉はそういうことへの感謝の思いであろう。

つながりというのは別に人づきあいに積極的でなくても、今与えられている環境で当たり前で過ごすことで作り出されるものであると思う。しかしどうせなら、時には他者へ思いをはせることで、より助け、より強くしていきたいものである。

企業、団体でも同様で、特に絆づくりを目的としている組織でなくても、それぞれの事業目的遂行の中で絆をつくる機会を提供することはできる。前号当欄にあった元受刑者の雇用もその良い例である。

当社でいえば地元バス会社として、当協会とバスの車内吊り広告で協力させていただいてきた。相談員養成講座の新規応募者には、車内吊りで見たとという方が結構いらっしやるとか。一方、悩みに包まれた方が車内吊りで当協会のことを知るといふこともあるかもしれない。

講座を修了され相談員として活動されている方の元へ、悩みや苦しみの中でふと、この電話のことを思い出し、かけてこられる方がいる。そして相談員の寄り添いの思いや言葉によって、救われるのちや慰められるところがある。そんなふうに見知らぬ同士が乗合バスを介してところをつなぐというお手伝いができるなら幸いである。

現在はコロナ禍で、絆を強める重要な要素、「会う」という部分が大きく制限されている。しかし手紙や電話あるいはメールやネット等方法は色々ある。離れていてもリアルタイムの映像で対話できる時代である。家族や友人その他それぞれのつながりをどう作るか、どう手繰り寄せかを改めて考える良い機会ではないだろうか。

開催にあたって色々論議のあったオリンピック、パラリンピックであったが、集い、競い合い、讃え合うシーンを目にするとはやはり感動に包まれた。決戦後のインタビューでは、喜びがほとぼしり、悔しさがにじみ出ていたが、多くの選手が「色々な方々に支えられてここまで来られた」ということを口にしていた。

つなぐ、支え合うということの意義を改めて感じた次第である。
（協会前副理事長）